広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	文学の授業後に児童が創作した物語『一本のさざんか』 ： 教材「水仙月の四日（宮沢賢治・作）」
Author(s)	髙橋，茉由
Citation	国語教育思想研究 ， 32 ： 337 - 341
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054835
Right	
Relation	

文学の授業後に児童が創作した物語『一本のさざんか』
―教材「水仙月の四日（宮沢賢治・作）」―

秋田大学　　髙橋　茉由

キーワード：物語創作、イメージ、文学の可能性

1. はじめに

本資料で掲載するのは、小学校３年生の児童が作った物語である。本文の文章のみを掲載者が文字起こしをしたものと児童の描いた絵を掲載する。明らかな字の間違いだと思うものは訂正したが、それ以外は児童がイメージした言葉かもしれないと思い、そのままにしている。また、実物は縦書きであったが、投稿に合わせて横書きに変更している。改行は実物に合わせている。実物は、文字と絵が一緒に書かれてあったため、本来なら作品そのものを掲載した方が良いと考えたが、文字が薄くてデータ化することができなかったため、実物の本文となるべく同じ位置に絵のみを掲載している。実物の絵はカラーだが、見やすくするため白黒で載せている。

児童が創作した作品の掲載に関しては、児童及び保護者から掲載の承諾を得ている。

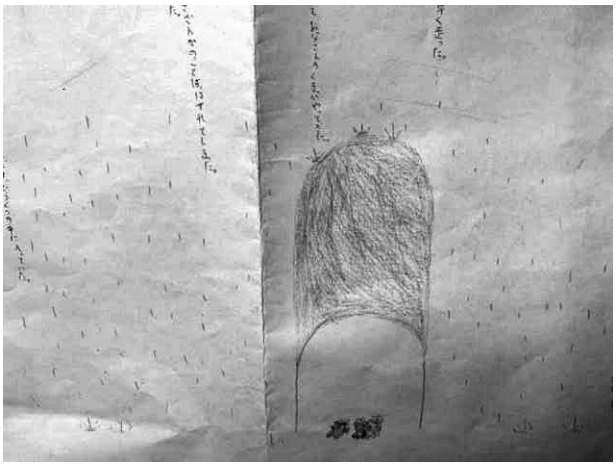
2. 児童が創作した物語

一本のさざんか　　ユリナ（仮名）　作・絵

さざんかは、みんなが外で遊んでいる時によく見かける花だろう。
でも、冬の寒い時は、あまり見たことがないと思う。
そのことを知って、二人の小さな子どもがきけん生物もいるし、家から 14 ㎞もはなれているし、なんきょくと同じくらい寒いのにわざわざ
「どうしても見たい。」
と見に行ったのだった。

ザーザーと流れる滝をよれよれの木で橋を作り、上がりの山を、二人でロープを使って、下りの山をすべりどめのくつと上がりの時に使ったロープを使って、そして、昨日の雨でどろっどろになった地面をじょうぶな長ぐつを使って、このくるしい道をこえてやっとたどりついたのだった。
それは、めざしていた、山おくの広い所だった。
でもさざんかは、この寒の山おくに、一本しかないのだった。
二人はさがしつづけたのだ。

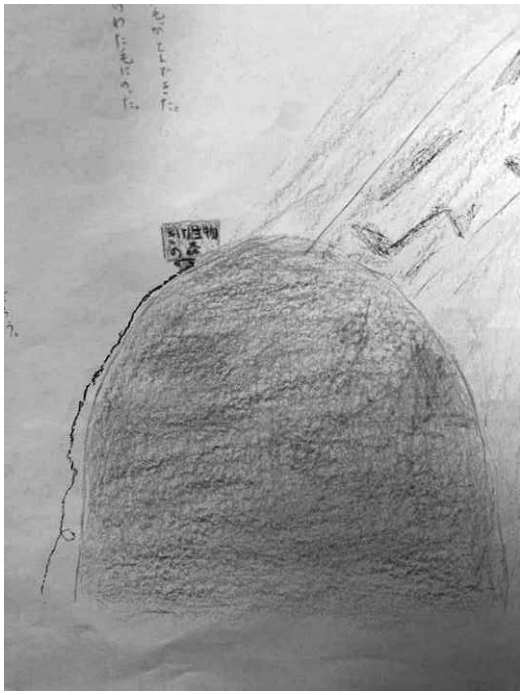
夜になりました。
「ないじゃないか。」
「朝・昼・夜何も食べてないんだぞ。」
「もうへとへとだよ～。」
ザーザーザー
「雨だ。」
二人は、足音を立てて岩の下へと急いで、馬のように早く走った。
まるでそこは、暗くてぶきみなどうくつのようだった。
そして、どうくつは、入口と出口が同じあななのだ。
ドンドンドン
雨にまぎれて、何かのかげでどうくつは、もっと暗くなった。
二人はなきそうになった。
どうくつの中に入ってきたのは、くまだった。
生まれたてで、小さくて、体はほにゃほにゃの赤ちゃんをつれた、お母さんと、お父さんのくまがやってきた。



（絵の説明）洞窟の中に、熊の家族がいる様子が描かれてある。洞窟は黒色。洞窟の周りには、水色で雨が降っている様子が描かれてある。

二人はなきそうだったけど、ぐっとこらえて、
「さあ、走ろう。」
「うっ、うん。」
二人は、馬よりも早く走った。
くまが入れない、小さなどうくつをさがした。
でも、雨がどろっどろの地面をたたき、前が見えなかった。
もうそのころは、本当に命がけだったので、まっかなきれいなさざんかのことは、わすれてしまった。
そんなきょうふの中でも、赤い、きれいな物だけを一つ見つけた。
「あっ。」
「なんだ？。」
「何？あれ。」
「どこだ！そんな物などは、ない。それより、急げ。」
バンッ！
「どうした？。」
まっ黒な岩にぶつかっていた。
めの前が、いっきに暗くなった。
「きっと、どうくつの中だ！。」
「おっ、おう、そうだなぁ…。」
入口の方を見ると、くまが、どうくつに入ろうとして、あなから頭がぬけなくなったように、顔だけ、どうくつの中に入っていた。
「ははっおもしろ。」
「おもしろすぎるね。」
二人は、ちょっと夜にねることが、こわそうに言った。
でも、その話より、さっきの赤いものが何なのかを、一生けんめい考えていた。

朝になりました。
「わあっ。」
「きれいに晴れた。」
二人のとなりには、きれいな太陽にてらされた赤いきれいなさざんかがさいていた。
「さざんかだ。」
「本当だ。」
さざんかは、もう、きれいすぎてくまのことを思い出すと、感動して、本当のなみだがながれた。
その時は、朝・昼・夜・朝と、食べていないことを、わすれていた。
それをながめていると、何分かたって、
「ぐぅ〜。」
「おなかがすいたなあ。」
二人は、近くの川の水をのんだ。
川の水をのんだだけでも、感動のなみだがながれた。



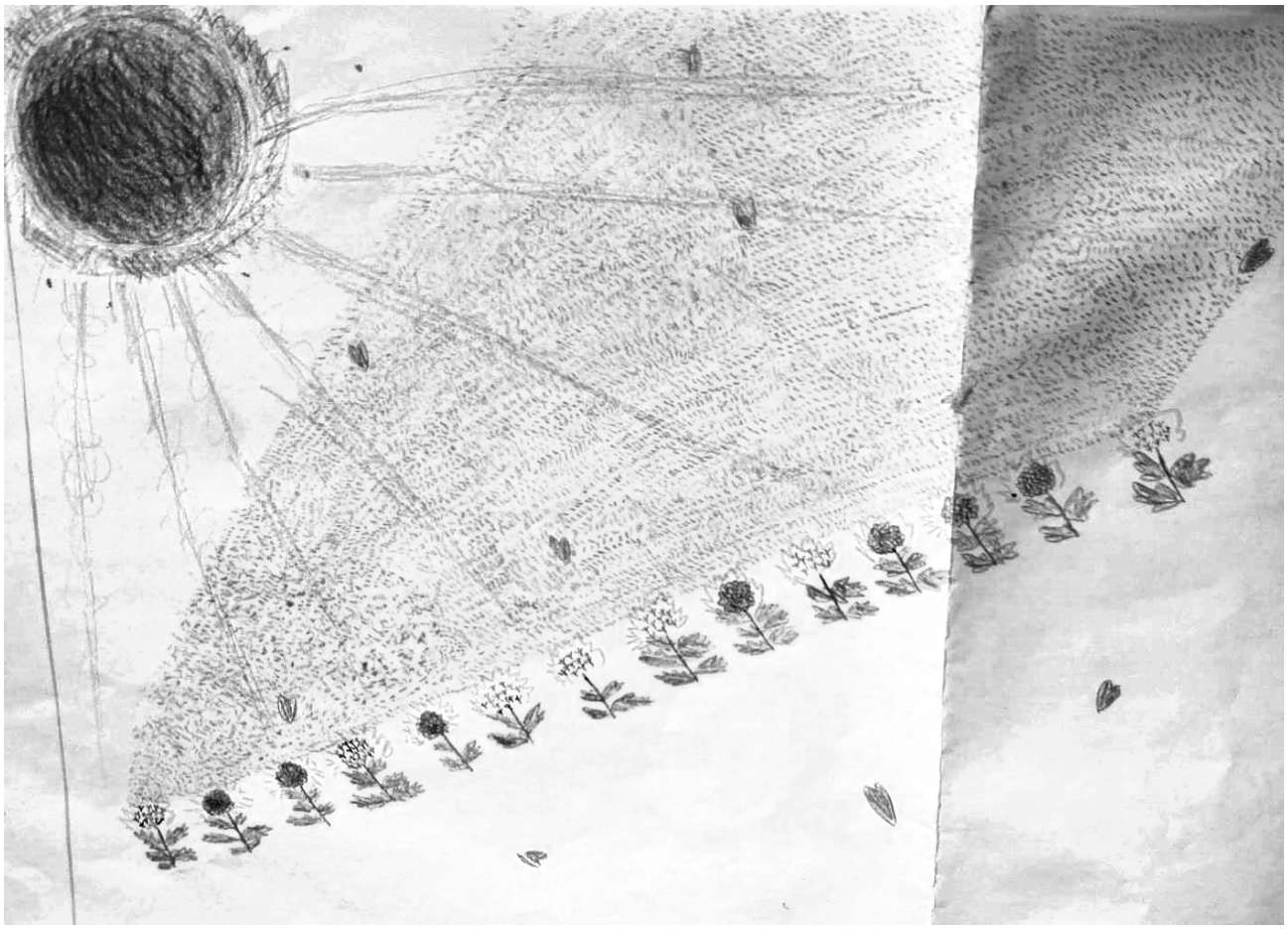
（絵の説明）真ん中に山が黄緑色と緑色で描かれてある。山の左上には、「きけん生物の森」と立て看板が茶色で描かれてあり、山の右上には、茶色、黒色、水色で風のようなものが描かれてある。

やがて、春になりました。

二人の父や母は、二人がいきているかどうかが心配だった。
だから、父や母は、かなしいなみだをながした。
この二人は、春までどうくつの中で、くらしていた。
二人は、大きなきずができながらもまだいきていた。
写真には、冬と春の花ばかりがうつっていた。
そこには、家族の写真もあった。
それを見た二人は、
「もう家へ帰るか。」
「うん、でも帰る体力がないな。」
「じゃあ、ゆっくり帰ろう。」
と言ったしゅんかんに、さざんかは光り、たんぽぽのわた毛がとんできた。
二人は、何も食べてなかったから、体がういて、たんぽぽのわた毛にのった。

「これで帰ろう。」
たんぽぽのわた毛は、家の方へ、とんだ。
家のベランダに着いた。
家族は、一生けんめいに走ってきて、
「いきてたの？うれしすぎるわ。」
家族は、みんな言った。
そして、ベランダのうえきばちの土に、たんぽぽのわた毛をうめた。

このわた毛はいつか、花になり、山のおくへ、一本のさざんかをさがしに行ったしょうこになるだろう。



（絵の説明）下にいくつも咲いている花は、タンポポだと思われる。黄色の花が咲いている花と、綿になっている花が描かれてある。花の茎と葉は、深緑色である。花の上にある複数の点は、水色で描かれてある。一つ一つ点が丁寧に並べてある。綿毛を表現したものと思われる。花と綿毛の周りを花びらが舞っている。花びらは、桃色。桜の花びらを表現したと考えられる。左上には、橙色と黄色で描いた太陽がある。その太陽から黄色の日光が注いがれてある。

3. 作品及び学習者に関する説明と考察

ある日、児童がこの物語を担任である私に見せてきた。家で書いてきたのだと言う。後日その児童の母親に聞くと、児童は、宮沢賢治の『水仙月の四日』の授業[1]を終えた後に、家で黙々とこの物語を書いたと言う。文章を書いた後に、丁寧に絵を描いていたと話してくれた。

最初に、私がこの物語を見た時、何かすごい作品に出逢ったと感じたが、言葉にするとちっぽけになってしまうと感じ、感想を述べることができなかった。児童にどう返答したか覚えていないが、どうにかして表情とありきたりの言葉で自身の衝撃を伝えようとしたことを覚えている。

『一本のさざんか』を創作した児童は、目標を掲

げ、その目標を達成するために日々努力する児童である。また、周りの評価を気にせず、自分がしたいことをまっすぐに取り組む児童である。

『水仙月の四日』を教材として扱った国語科「読むこと」の授業において、物語を創作した児童ユリナは単元最後の振り返りで、以下のように記入していた。以下の振り返りで学習者は、それぞれの登場人物についてわかったこと及び何を通して分かったかを記入するように指示されている。よって、ユリナも、登場人物の項目ごとに、なるべく根拠を示しながらわかったことを記入している。

【雪わらすについて】
はじめは、三人の雪わらすがいて、その雪わらすは、死んでもいいと思っているのだと思っていましたが、水仙月の四日を読んで、四日（掲載者注：「四人」の間違いか。）の雪わらすがいて、三人は、死んでもいいと思っていて、一人は、助けようとしているんだと思いました。

【子どもについて】
はじめは、ただ、カリメラがすきで、食べたかっただけだと思ったけどリナさん（掲載者注：仮名）の詩を読んで、「作り方もおぼえたよ。」と文章の中にあったので、ただ、すきなだけではなく、カリメラのことを一生けんめい、おぼえて、やったのだなあと思いました。そして、ユカリさん（掲載者注：仮名）の詩を読んで「足がぬけない。」とあったから、カリメラがよっぽどすきで、それでも、家にむかっているんだなあと思いました。

【雪おいのについて】
雪おいのの詩を書いて、雪わらすにめいれいされて、つかれていることが分かりました。

【雪ばんごについて】
「水仙月の四日だぞ。ひゅうひゅうひゅひゅう。」と、先生が作った教科書（掲載者注：授業で扱いやすいように、授業者が作成した冊子。『水仙月の四日』の本文と絵が掲載してある。）に書いてあったから、水仙月の四日は、よっぽどだいじな時なのかなあと思いました。

【そのほか（お父さん）について】[2]
たぶん、お父さんは、子供を見つけて、命がけで、足が雪にはまる中、がんばって、子供をたすけにきたのかなあと思った。

【「水仙月の四日」全体について】
はげしい雪の中、子供は、歩き回って、雪わらすや雪おいのは、子供を助けようとして、さいごは、お父さんが助けに来た。雪ばんごは、はたらけとめいれいしていた。雪ばんごは、めいれいしていて、雪ばんご以外は、一生けんめい、子供を助けようとしていることが分かりました。

上記の振り返りを読むと、ユリナは登場人物の立場からの詩を創作したこと、他の学習者がつくった詩を読むこと、教材を読むことを通して、「各々の登場人物がどんな状況に置かれているのか」について理解を深めている。さらに、心情を推測して書いている文章が多く見られる。また、【「水仙月の四日」の全体について】では、登場人物同士の関係性を捉えている。

掲載者が特に注目したいと感じたことは、２点ある。１点目は、「子ども」と「雪ばんご」についての記述である。「子ども」の記述では、２名の学習者の詩を読んだことを通して、「なぜ急いで家に向かっているのか」についてユリナなりに詳しく推測している。この「子ども」の状況は、『一本のさざんか』の二人の子どもたちと似ている点があると掲載者は感じている。『水仙月の四日』の「子ども」は、カリメラを食べるために過酷な豪雪の雪道を歩いている。『一本のさざんか』の「二人の小さな子ども」は、さざんかを見るために、過酷な豪雨の山道を歩いている。どちらの登場人物も、一つの願いを強く抱いているからこそ、生死に関わる過酷な状況を気にもせず、進んでいく姿が描かれてある。

「雪ばんご」の記述では、「雪ばんご」を一方的に悪者として扱っておらず、「雪ばんご」にとって「だいじな時」であると認識している。「雪ばんご」にも立場や考えがあって行動していることをユリナは理解している。ユリナの記述には示されていないが、「雪ばんご」に関しては、ユウヤ（仮名）の作品の影響が大きいと掲載者は考える。ユウヤは、以下の詩をつくっている。

題名：ふらせふらせ　　作者：雪ばんご（ユウヤ）

ふらせふらせどんどんふらせ
きょうは、水仙月の四日だぞとくべつな日なんだから、
ふらせふらせもっともっとふらせーピューヒュー

このユウヤの作品を学級内の学習者は詩の朗読劇の発表会の際に読んだ。そのため、学級内では、「雪ばんご」を悪者として「ひどい人」だと評価する学習者が多数いるなか、ユリナのように「雪ばんご」の立場から理解を示す学習者も数名いた。この人間ではない世界の（自然界側の世界と言ったらよいだろうか）、理解し難く、一見ひどい人だと評価しやすい人物に対して、その人物の立場から状況を捉えている思考は、『一本のさざんか』にも表れている。『一本のさざんか』では、「熊の家族」が登場するシーンがある。「二人の子ども」はこの熊の家族に出会い、熊の家族から逃げるのだが、「熊の家族」が登場する場面の描写を次のように〈語り手〉は語っている。

生まれたてで、小さくて、体はほにゃほにゃの赤ちゃんをつれた、お母さんと、お父さんのくまがやってきた。

熊が、二人の子どもを食べようとしているわけでもなく、一方的に怖い存在として語っているわけでもなく、小さな赤ちゃんを連れた人間と同じような状況をもっている熊の家族として語っているのである。

２点目は、「その他」で「お父さん」を選択したことである。『一本のさざんか』でも両親の描写が表れており、帰りが遅いことを心配している心境は、『水仙月の四日』と共通する点がある。ユリナが「お父さん」を選択したということは、ユリナの中に家族である「お父さん」の存在を強く感じたのではないかと考える。

以上、作品や学習者に対する説明から考察を加えた。今回『一本のさざんか』を掲載した理由には、先述した作品との出逢いがあったこと、この作品を通して文学の授業の可能性を強く感じたことがある。

学習者ユリナは、文学の授業を体験して心の奥深くに感じたことを作品『一本のさざんか』として表現した。本節の冒頭に書いたように、ユリナは、目標を掲げ、その目標を達成するために日々努力する児童である。そんなユリナが今回の学習及び作品創作を通して抱いた風景の一つは、次のようなものだったのかもしれない。

生きるか死ぬかという恐怖を超えた世界に生きる、願いや希望、祈りを強くもつ子どもの姿。そしてその一方で、子どもが生きていることを強く願う親の姿。その親の願いとは関係なく、生死を気にせず生きている子どもの姿―。しかしながら、最後は親のもとに帰る。子どもは親の願いを感じとっている。だから生きられている。―願い、希望、祈りが「生きる」ことであるという風景。

以上のようなことを、掲載者はユリナの普段や学習の様子、作品から想像した。本節で考察を加えたが、言葉にしきれていない点が多くある。今後、掲載者なりに言葉にしたいと思う。

注

1　ここで述べている宮沢賢治の「水仙月の四日」の授業とは、髙橋（2020）「西郷文芸学「相変移」論を踏まえた授業―『水仙月の四日』を教材として―」（日本文学協会編『日本文学』69 号３月号、pp. 2-15）の論文に記載した授業のことを指している。小学校３年生に宮沢賢治の「水仙月の四日」を読む授業を行った。授業の内容など詳しくは髙橋（2020）の論文を参照されたい。

2　ここでは、【そのほか（お日さま、雪、風、お父さん　など）】と記載していた内、ユリナは「お父さん」を選択した。